口腔粘膜に発生した色素性母斑の2例

長谷川慶子・北田秀昭・野谷健一・福田 博
飯塚 正*・向後隆男*

Two cases of pigmented nevus of the oral mucosa

Keiko HASEGAWA・Hideaki KITADA・Ken-ichi NOTANI・Hiroshi FUKUDA
Tadashi IIZUKA*・Takao KOHGO***Abstract:** We report two rare cases of pigmented nevus of the oral mucosal membrane.

Case 1. A 16-year-old boy with a black tuberculous solid mass on the left hard palate, was referred to our hospital. As a malignant melanoma was suspected, an excisional biopsy with the surrounding soft tissue including the periosteum was performed under general anesthesia in preparation for radical operation. The frozen section was diagnosed as an intramucosal nevus.

Case 2. A 52-year-old woman with a dark brown, pedunculated mass on the lower surface of tongue, was referred to our hospital. As a tumor was suspected, an excisional biopsy was performed under local anesthesia. Histopathologically, a diagnosis of intramucosal nevus was made.

Key words: intramucosal nevus (粘膜内母斑), oral mucosal membrane (口腔粘膜), malignant melanoma (悪性黒色腫)

緒 言

色素性母斑は、胎生期の神経堤を起源とする母斑細胞の過誤腫の増殖物とされている。口腔粘膜に発生することはまれ(0.1~0.15%^{1~3)})で、本邦における口腔内母斑の報告は、山崎ら(1960)⁴⁾以来21例のみである。

著者らは、口蓋ならびに舌下面に発生した色素性母斑の2例を経験したので、報告する。

症 例 1

患 者：■歳、男子。

北海道大学歯学部口腔外科学第一講座
(主任：福田 博教授)*北海道大学歯学部口腔病理学講座
(主任：雨宮 璋教授)

First Department of Oral Surgery, School of Dentistry, Hokkaido University (Chief: Prof. Hiroshi Fukuda)

*Department of Oral pathology, School of Dentistry, Hokkaido University (Chief: Prof. Akira Amemiya)

受付日：平成7年4月6日

初 診：1993年10月■日。

主 訴：なし。

既往歴：特記事項なし。

現病歴：幼少時より無症状に経過した口蓋部の黒色腫瘍の増大傾向を通院中の歯科医に指摘され、紹介により当科を受診した。

全身ならびに顔貌所見：melanosisならびにmelanin pigmentationなどの異常は認められなかった。

口腔内所見：[5]相当口蓋粘膜に7~10mm大の軽度隆起した黒色腫瘍を認めた。腫瘍表面は平滑で、周囲には薄い“しみだし”がみられた(写真1)。腫瘍の前方の粘膜に軽度の知覚鈍麻を認めた。

臨床診断：右側口蓋部悪性黒色腫の疑い。

処置および経過：臨床所見では、悪性黒色腫の初期像ないしはpre-malignant melanosis⁵⁾との鑑別が困難であった。このため同年10月■日、全麻下に拡大手術を予定した上で、周囲軟組織および骨膜を含めた腫瘍の全摘生検を施行した。切除範囲は腫瘍周囲5mmの範囲とし、腫瘍は露出した大口蓋神経とともに一塊として切除した。迅速病理検査では悪性所見を認めず色素性母斑が疑われたため、遊離皮膚移植を行い

写真1 初診時口腔内写真
(症例1 ミラー像)

写真2 病理組織学的所見
(症例1 H-E染色, 弱拡大)

写真3 初診時口腔内写真 (症例2)

写真4 病理組織学的所見
(症例2 H-E染色, 弱拡大)

手術を終了した。1994年1月■日現在、経過は良好である。

病理組織学的診断：粘膜内母斑。粘膜上皮下に、胞巣状ないし索状に増殖する腫瘍細胞が認められた。腫瘍実質は類円形の核と弱好酸性の胞体を有する多角形ないし立方形の細胞よりなり、細胞質内には種々の量のメラニン色素が認められた。このような腫瘍細胞には、異型性や分裂像などはほとんど認められなかった(写真2)。

症 例 2

患 者：■歳、女性。

初 診：1993年11月■日。

主 訴：なし。

既往歴：高血圧症。

現病歴：約5年前より右側舌下面に黒色腫瘍を自覚していたが、放置していた。半年前より通院中の歯科医に腫瘍の増大傾向を指摘され、紹介により当科を受

診した。

全身ならびに顔貌所見：特記事項なし。

口腔内所見：右側舌下面粘膜に7×6mm大、ヒダ状の境界明瞭な有茎性腫瘍を認めた。腫瘍は、暗褐色で表面平滑(写真3)、弾性はやや硬、圧迫による退色はみられず、拍動は触れなかった。

臨床診断：右側舌下面部腫瘍。

処置および経過：血管腫あるいは色素性母斑が疑われた。局麻下に周囲組織を含めた腫瘍の全摘生検を施行した。1994年11月■日現在、経過は良好である。

病理組織学的診断：粘膜内母斑。粘膜はポリープ状の腫瘍を形成し、粘膜上皮下の膠原線維束間に胞巣状ないし索状に増殖している色素沈着の著明な腫瘍組織が認められた。腫瘍実質は、胞体内に比較的多量のメラニン色素を有する多角形ないし紡錘形の細胞よりなっていた。このような腫瘍細胞には、異型性や分裂像はほとんど認められなかった。(写真4)

考 察

口腔粘膜に発生する色素性母斑は一般に青～壮年期^{6～8)}の女性に多い^{3, 6, 8, 9)}とされている。発生部位は口蓋が最も多く、他に頬粘膜・歯肉・口唇が挙げられている^{2, 3, 6～9)}。舌下面に発生したものの報告

はない。大きさは一般に10mm以下^{1, 3, 6, 9)}であるが、本邦報告例はやや大型のものが多かった。色調は黒色のpigmented typeが多いが、non-pigmented typeも17%~34.6%^{3, 7)}の頻度で報告されている。形態的には乳頭状が多く、平坦なもの、軽度の膨隆や半球状、ポリープ状、肉芽腫様などさまざまである。

組織学的には、皮膚科領域のものに準じて母斑細胞の分布状態により接合性母斑、複合性母斑、粘膜内母斑の3型に分類されるが、粘膜内母斑が最も多い。接合性母斑の報告例は少ないが、皮膚科領域では悪性黒色腫の前駆症としての意義も論じられている¹⁰⁾。口腔粘膜の黒色症が悪性黒色腫の前駆症状として認められる頻度は、約30%とする報告が多い¹¹⁾。しかし、口腔粘膜の色素性母斑が悪性黒色腫の発生母地になり得るかという点については論議がある^{12~15)}。臨床所見のみでは、症例1のように悪性黒色腫の初期ないしはpre malignant melanosis⁵⁾との鑑別困難な症例もある。神保¹⁶⁾は、悪性黒色腫との鑑別点として(1)色調が均一であること、(2)境界が鮮明であること、(3)辺縁が平滑であること、(4)出血や壊死などを伴わないことを挙げている。症例1は、周囲にしみだしがみられ、周囲粘膜に知覚鈍麻がみられるなど悪性黒色腫を否定できなかった。なお、知覚鈍麻の原因は、病理組織学的に一部腫瘍胞巣への神経線維の巻き込みが主因と考えられた。このような症例に対しては、悪性黒色腫の可能性を考慮して拡大手術を想定し、術中迅速病理検査などにより病理組織学的診断を確定することが必要である¹¹⁾。また、粘膜内母斑から悪性黒色腫の発生をみた報告もあり、長期にわたる経過観察が必要である。

結 語

色素性母斑の臨床像は多様で、悪性黒色腫の初期像ないしはpre malignant melanosis⁵⁾との鑑別に苦慮する場合もある。

今回、悪性黒色腫を強く疑った1例、ならびに舌下面というまれな部位に発生した1例の色素性母斑を報告した。

本論文の要旨は第48回日本口腔科学会総会(於 大分)において発表した。

引 用 文 献

- 1) 西山茂夫: 口腔粘膜アトラス. 分光堂, 東京, 1982, 158-159.
- 2) King, O.H., Blankenship, J.P., et al.:

The frequency of pigmented nevi in the oral cavity. *Oral Surg* 23: 82-90 1967.

- 3) Buchner, A. and Hansen, L.S.: Pigmented nevi of the oral mucosa; a clinicopathologic study of 32 cases and review of 75 cases from the literature; Part II. analysis of 107 cases. *Oral Surg* 49: 55-62 1980.
- 4) 山崎真理子, 公文義貢: 硬口蓋腫瘍(母斑)の1症例について. *耳鼻臨床* 53: 354-358 1960.
- 5) Rippey, J.J. and Bender, S.: Premalignant melanosis and malignant melanoma of the oral mucosa. *J Dent Associ South Africa* 37: 573-578 1982.
- 6) 石川悟郎, 秋吉正豊: 口腔病理学Ⅱ. 末永書店, 京都, 1989, 594-597.
- 7) Weathers, D.R. and Waldron, C.A.: intra-oral cellular nevi. *Oral Surg*. 20: 467-475 1965.
- 8) Trodahl, J.N. and Waldron, W.G.: Benign and malignant melanocytic lesions of oral mucosa. *Oral Surg* 25: 812-823 1970.
- 9) Buchner, A. and Hansen, L.S.: Pigmented nevi of the oral mucosa; a clinicopathologic study of 32 cases and review of 75 cases from the literature; Part I. A clinicopathologic study of 32 new cases. *Oral Surg* 48: 131-142 1979.
- 10) 森島隆文, 遠藤幹夫, 他: 色素細胞性母斑上に発生した悪性黒色腫について. *臨床* 29: 657-662 1975.
- 11) 野谷健一, 山崎 裕, 他: 口腔粘膜メラニン沈着症より発生したと思われる悪性黒色腫の1例. *日口外誌* 35: 2335-2342 1989.
- 12) 梅田正博, 寺延 治, 他: 口腔粘膜原発悪性黒色腫の臨床的・病理組織学的検討, 第3報: 口腔粘膜の良性および前癌性色素性病変について. *日口外誌* 35: 2065-2074 1989.
- 13) Villa, V.G. and Laico, J.E.: Intradermal nevus in the oral cavity evidently developing into a primary melanoma. *J Oral Surg Anes Hosp D Serv* 19: 329-333 1961.
- 14) Hansen, L.S.: Changing concepts of the junctional nevus and melanoma: review of the literature and report of case. *J Oral Surg* 39: 961-965 1961.
- 15) 高木 実, 石川悟郎, 他: 口腔粘膜の悪性黒色腫に関連してみられる特異な黒色症について. *口病誌* 39: 565-577 1972.
- 16) 神保孝一: 悪性黒色腫の基礎と臨床. 富士書院, 札幌, 1987, 124.